

「自業自得の人工透析患者なんて、全員実費負担にさせよ！無理だと泣くならそのまま殺せ！今のシステムは日本を亡ぼすだけだ！！」との長谷川豊氏のブログ発言に抗議するとともに、日本の社会保障の在り方や難病患者・障害者・高齢者が尊厳をもって生きてゆくことができる「共生社会」の実現に、政府・国会が国民とともに真摯に取り組むことを要望します。

2016年10月17日

一般社団法人 日本難病・疾病団体協議会
代表理事 森 幸子

フリーアナウンサー長谷川豊氏の公式ブログ「本気論 本音論」2016年9月19日、9月22日で、人工透析患者に対する「全員実費負担にさせよ！無理だと泣くならそのまま殺せ！」（批判を受けて現在はタイトルを一部変更）という書き込みは、その表現の殺伐さと乱暴さに透析患者のみならず多くの難病や長期慢性疾患に苦しむ患者・家族に非常に大きな衝撃をもたらしました。

それは言辞の乱暴さだけではなく、多くの誤解や夜郎自大的な上から目線による独り合点である、との批判はあるにせよ、相模原の施設や療養型病院、特別養護老人ホーム等で次々起こっている事件、中高校生を引きずり込む命の軽視による不幸な事件の連続を強く思い起こさせるものだからです。

ネット上でも多くの意見や感想、論争が続いていますが、このような人権を無視した発言に対してメディア上の有名人によるものにもかかわらず、多くの報道機関が沈黙していることにも私たちは不安を感じています。それは長谷川氏の意見に対して「もっともな点がある」というのか、あるいは身内かばいなのか、または論点を見つけられないでいるからなのか、ではないかと感じるからです。

この問題は単に日本の医療保険制度の経済的な背景の問題だけではないと思います。彼が言うように日本の社会保障システムに多くの課題があることは明らかです。しかし彼はそれに対する具体的な指摘はなく、すべて高額な医療費を使っている透析患者を代表する治療を標的にし、口汚く罵っている

だけではないでしょうか。そこには現状に対する改革の意気込みもなく、社会制度の改革に真剣に取り組んでいる患者会に対する認識のかけらも見当たらず、非科学的で偏ったものでしかないのは非常に残念なことです。そして何よりも見過ごせないのは彼の言動に対して一定の支持者がいることと、現実には医療機関の中にはそのような思考を持つ医療者もいるということです。それは現在の医療や社会保障システムの改革に対する意見というよりも、今の日本の社会の不平等感、逼塞感を反映していると思わなければならないと思います。

長谷川氏の発言はその状況の中にある、ある種の偏見と差別意識に対する煽動となっていることは非常に危険なことと思います。なぜなら現実社会の不平等と経済的な逼塞感に対する感情的な発露の方向が、多くの場合、自分よりも一段と低いものと思う人たちに対する具体的、短絡的、独善的な行動を引き起こしかねないからです。長谷川氏が「バカ」と表現するその人たちが攻撃する方向へと駆り立てることが多いのは歴史が証明していることです。

人は誰もが心にひそかな闇を抱えているのではないのでしょうか。

私たちはその社会の抱える危険性が一層広がることがないように願い、多くの国民が感じている、社会の逼塞感と不平等感の解消に国と国会が真剣に取り組むことを強く願っています。

多くの方々のご尽力によって2015年1月1日から施行された難病法の「基本理念」第2条では「(難病の患者が)地域社会において尊厳を保持しつつ他の人々と共生することを妨げられない」と規定し、難病対策委員会(2011年12月「中間的整理」)では「希少・難治性疾患は遺伝子レベルの変異が一因であるものが少なくなく、人類の多様性の中で、一定の割合発生することが必然」であり、したがって「希少・難治性の患者・家族を我が国の社会が包含していくことがこれからの成熟した我が国の社会にとってふさわしい」ことを基本的な認識としています。長谷川氏は人工透析患者を一般化して非難しているのではない、と弁明していますが、たとえどのような理由で病気になったとしても、私たちはその多様性を認め合い、病気や障害による差別、区別をすることなく、この難病対策の基本的認識や難病法の指し示すような成熟した社会が実現することを強く願っています。